



特集

もっと楽しい図書館に！ 帯広図書館友の会

シリーズ「北海道の木と文化」① … 根釧台地の格子状防風林〔中標津町〕
——厳しい自然から人命・財産を守り歴史を経て変わりゆく林帯

ほっかいどうの本 … 『信じ合う 支え合う 三浦綾子・光世エッセイ集』
『札幌の地名がわかる本 10 区の地名を徹底解説！』
『カリンクル オホーツク流水の民のものがたり』

特集

帯広市図書館は、市民との協働を運営方針の一つに掲げ、2006年に現在の場所に移転開館しました。現在もさまざまなボランティア団体が図書館を舞台に魅力ある活動を展開し、市民サービスを支えています。今回は「帯広図書館友の会」で絵本の読み聞かせなど、おはなし部門を担当する「おひさま」に焦点をあて、関係者の皆さんに活動の特色などをうかがいました。

もつと楽しい図書館に！ 帯広図書館友の会

おはなし会に
親子で集ま〜れ

帯広市図書館が開館13周年を迎えた2019年3月3日の午前11時、100人を超える家族連れが館内の多目的視聴覚室に集まりました。帯広図書館友の会「おひさま」によるおはなし会「ひなまつりスペシャル」の始まりです。大型絵本の読み聞かせだけでなく、紙芝居、手遊び、パネルを舞台にひな人形の絵を

貼り、お話を展開するパネルシアターなどに、子どもたちは、食い入るように見つめ、一緒に歌をうたい、手遊びを楽しみました。

この日は日曜日。市の広報誌と図書館のホームページでの案内、館内でのチラシの設置、地元ラジオで普段どおりの周知をしたところ、会場が満員になるほどの来場客が訪れました。

「おひさま」のおはなし会の普段の活動は、毎月第2水曜日と第3土

曜日です。

帯広図書館友の会の梶澤弘子代表は「理想的なおはなし会が続けられ、図書館の利用者に定着してきたと感じています」と目を細めます。

以前の帯広市図書館（1968年完成）は、圧倒的に多い閉架図書、急な階段があり、おはなし会の会場や駐車スペースも狭くなっていました。また、救急病院がそばに建ち、静かに読書をする環境ではないなど利用しづらい状態となっていました。

た。新たな図書館建設構想が持ち上がったところ、図書館職員や市民には「何とかいい図書館にしたいという熱意がありました」と梶澤代表は回想します。市民へのアンケート調査や公開プロポーザル方式による建築構想の選択、建築中の現場見学会などを実施して新しい図書館への期待を醸成していきました。JR帯広駅そばに完成した今の図書館は「休日はもちろん平日でも午前10時の開館をロビーで待つ方が大勢い



手前右側から帯広図書館友の会代表の梶澤弘子さん（手前右）、「おひさま」部門長の五十嵐尚子さん（奥中央）、同会員の竹腰嘉代子さん（手前左）と上杉恵利子さん（奥右）、帯広市図書館副館長の鈴木恵さん（奥左）

「らしやいます」（鈴木恵副館長）
というほど、市民に親しまれる施設
になりました。

新図書館とともに生まれた 帯広図書館友の会

帯広図書館友の会は、新図書館の
基本設計が進んだ2002年11月に
発足しました。「旧図書館の時も、
ボランティアを行う団体や個人がそ
れぞれ活動していましたが、単独的
活動が多くありました。『こうした
活動が一つにまとまればいいね。今
まではなかった活動もやりたいね』
と発足したのが、図書館友の会で
す」と鈴木副館長は振り返ります。
友の会の活動は、6つに分かれて

います。図書館内の見回り、児童の
見学案内など利用者を援助する「フ
ロアサポート部門」、誰でもが図書
館利用をを目的に対面朗読サービ
スなどを担う「ハンディキャップサ
ポート部門」、図書交換会や子ども
図書館のつどいなどのイベントを企
画運営する「つどい部門」、布の絵
本やおはなしポケットなどを作る
「製作部門」、図書の修理などをする
「製本部門」。そして、おはなし会な
どを行う「おはなし部門『おひさ
ま』です。

「おひさま」は、帯広市図書館で
の定例のおはなし会のほか、市内の
保育所などで出前のおはなし会も年
10数回行います。所属する会員は25
人。部門長を務める五十嵐尚子さん

ボランティアが運営を支える帯広市図書館の外観と内部

は、広尾町や土幌
町でも児童書や絵
本の読み語り、人
形劇などのサーク
ルを立ち上げてき
た経験を持ち、帯
広図書館友の会設
立時に参加したメ
ンバーの一人です。
「おひさま」で
は、読み方の練習
は個人に任せてい
ます。おはなし会

で読む本は読み手が楽しいと思う本
を選びます。「私たちはプロではあ
りませんから、始めたばかりで、た
だたどしくても大丈夫。見ていたお
母さんが『これなら私でもできるか
も』と思ってもらえれば、大成功で
す」と、五十嵐さんは言います。気
軽に参加できて、しばらく休んでも
戻ってきやすい敷居が低い集まり。
なにより、読み手自身が楽しめるこ
とを大切にしながら活動しています。

子どもたちが、飽きずに楽しんで
もらえるようなおはなし会にするた
めの工夫もあります。エプロンを
使って物語を展開する「おはなしポ
ケット」（製作部門作成）、折り紙の
紙芝居など、本を読む以外の要素も
積極的に取り入れている点が「おひ
さま」の特徴です。

また、会員向けには、現役の保育
士を招いて手遊びの講習などを実施
しているほか、アイヌの絵本を読む
ためにアイヌ文化を学ぶ勉強会を開
くなど、新しい知識や技術が得られ
る機会も設けています。

乳幼児向けのおはなし会 母親同士の交流すすむ

「おひさま」が毎月第2水曜日に
開いている乳幼児向けのおはなし会

が好評です。会場となっている図書
館「こどもの本の森」のおはなし室
は、乳幼児の親子やマタニティドレ
スのママ予備軍で毎回満員になる盛
況ぶりです。

生まれたばかりの赤ちゃんに絵本
を贈る「絵本との出会い事業」は
2004年から帯広市として取り組
んでいるほか、こどもの本の森には
図書館司書が選んだ絵本がまとめて
借りられる「子育て応援バッグ」を
用意するなど、子育て支援に力を入
れてきました。

鈴木副館長は「働くお母さんが育
児休業を取った場合、日中に会える
知人や友人がいけないという方もいま
す。そんな方たちが定期的に集ま
り、知り合える機会として、おはな
し会は役立っています」と、お母さ
ん同士が図書館で待ち合わせるなど
交流の輪が広がっている手応えを感



おはなしの世界に引き込まれる子どもたち



パネルシアターや手遊びなども取り入れたおはなし会が特徴の「おひさま」

じています。

おはなし会で、赤ちゃんは意外なほどお母さん、お父さんの膝の上でおとなしく話を聞いています。こんなにゆったりした時間が子どもと持てることに初めて気付く親もいるそうです。もちろん泣く子もいます。それは当たり前前で、だれも気にも留めません。そんな気楽さもおはなし会が人気の理由です。

乳幼児向けのおはなし会では、助産師だった会員の上杉恵利子さんが活躍しています。別海町から転居し、仕事や介護が一段落した上杉さ

んは、図書館から帯広図書館友の会を紹介され入会しました。「最初は本を読むぐらいしかできない」と思っていました。いまはベビーマッサージの資格を活かした赤ちゃんのエクササイズやマッサージを、おはなし会の中で教えています。自宅で絵本を読んであげる以外の選択肢が増え、お母さんたちから喜ばれています。「見て楽しかったの、自分もやってみたいと会員になってくれた若いお母さんもいます」と仲間が増えた喜びを語ります。

50年におよぶ おはなし会のあゆみ

帯広市図書館で開かれるおはなし会の歴史は、50年前までさかのぼることができます。図書館に残る最も古い記録は、1969年6月の「日曜童話教室」というものです。それが1971年に「日曜童話会」という名称になり、毎月1回開催されるようになりました。

このおはなし会を開くボランティア団体として十勝童話会が1973年に発足しました。帯広図書館友の会の梶澤代表は、十勝童話会の設立間もないメンバーの一人でありました。「テレビが普及して、子どもたちの興味が視覚から得る刺激ばかりに向いているという危機感があり、図書館と共につくった団体です」。梶澤代表は、母親が語る民話や昔話などが大好きで、幼稚園教諭になっても、より多くの子どもたちに「こんな面白い世界があることを伝えたくて」十勝童話会に参加しました。

毎月1回の日曜童話会は、学校の週5日制移行に伴い2001年から土曜日開催になりました。いまでも毎月第1土曜日に「土曜童話会」を開く十勝童話会では、本や小道具など

を一切使わない「語り」にも力を入れていきます。梶澤代表は「子どもの生活経験でイメージを膨らませられるのが、語りの魅力です。子どもたちがお話の世界に引き込まれ、夢中になっていく様子を見ると、私もわくわくします」と説明します。

十勝童話会や「おひさま」のほかにも、おはなし会を開催している団体があり、帯広市図書館では毎週土曜日の午前11時からおはなし会が開かれています。

第2土曜日は、十勝童話会とはほぼ同時期に発足した「月曜読書会」がおはなし会を担当していましたが、2018年に解散。代わって誕生したワクワク会が「ワクワクおはなし会」を開いています。

第3土曜日は「おひさま」が開く「おひさまおはなし会」があり、第4土曜日は、この本だいきの会帯広支部が「土曜おはなし会」を開きます。たくさんのお本を用意して、さまざまなジャンルの本を紹介するのがこの会の特色となっています。

第5土曜日は、図書館職員有志による「五つ★」が「キラキラおはなし会」を担当しています。

乳幼児向けのおはなし会も拡充され、「おひさま」のほか、2013年からは毎月第4水曜日に、にこに

こ会が「にこにこおはなし会」を開催しています。

毎週開かれるほど、おはなし会の活動が活発になったのは「新しい図書館が完成してからです」（鈴木副館長）。複数の団体に所属する人もいますが、帯広図書館友の会が発足した2002年以降、ボランティア育成のため定期的に「語り手育成講習会」を開いて人材確保に努めてきたという背景もあります。この講習会の受講者たちが中心となってワクワク会やにこにこ会を立ち上げ、おはなし会の開催に努めています。

五十嵐部門長は「土曜日のおはなし会には、お父さんが多く訪れるようになってきました。おひさまでも男性の読み手が増えています」と、男性の育児参加が目立つようになったといい、鈴木副館長も「男性だけの語り手育成講習を開くことができるとなりました」と話します。

初代代表・青柳さんの 思いを受け継いで

帯広図書館友の会を語る上で、欠かせない人物が、初代の代表を務めた故・青柳規子さんです。青柳さんと帯広市図書館との関わりは深く、1972年に帯広市内各所に配置さ

れた「市民文庫マスター」の一人です。帯広市は図書館から離れた地域でボランティアの自宅に、図書館の本などを置いてもらう市民文庫を開設しました。自宅で地域住民にその本を貸し出すのがマスターの役目です。

図書館協議会の委員も10年間にわたり務め、新しい図書館の在り方についてさまざまな資料を自ら用意し提案しました。その流れもあって、友の会設立準備会の代表に就き、亡くなる2011年まで帯広図書館友の会代表、市民文庫マスターを続けました。

青柳さんを知る人に思い出を聞くと、共通しているのが本に関する圧倒的な知識の広さと深さです。青柳さんに誘われ、十勝童話会、図書館友の会に参加した竹腰嘉代子さんは「本の情報がとても早いだけでなく、全国の図書館の情報、本に関わる活動事例にも非常に詳しく、みんなの活動意欲を高める働きをされていた」と振り返ります。

青柳さんはいつも、本を詰め込んだ手提げのかばんを両手に持ち、「これは、あなたが読むといいと思って」と本や雑誌、パンフレットをみんなに手渡して回っていたそうです。「帯広の書店をなくしてはい

けない」と市内の書店にもよく顔を出していました。

青柳さんは、絵本や児童文学以外にもヤングアダルト、漫画まで幅広いジャンルの本を読んでいたそうです。「いつ、そんなに読む時間があるのかと思っていました」と梶澤代表も舌を巻くほどの読書量です。

竹腰さんが、なぜ十代向けの小説まで読むのかを尋ねると、青柳さんは「若い人に本に触れてほしいから」と即答しました。さらに「子どもが小さい頃は親が図書館に連れて



男性の話し手も増えています



絵本を詰め合わせたバッグによる貸し出しも行っています

きますが、小学校中学年ぐらいになると、図書館に來なくなってしまうと、図書館に來なくなってしまうと、一番、良い本に出合っていない時期なのに。だから、まず自分が読んでみて薦める必要があるのです」と。

青柳さんの自宅には、いまも5000冊以上の蔵書が保管されているそうです。竹腰さんらは「貴重な財産です。いつか文庫を再開できればいいのですが」と願いつつ、活用策に思いを巡らせています。

北海道の 木と文化 ①



根釧台地の 格子状防風林

厳しい自然から
人命・財産を守り
歴史を経て変わりゆく林帯

根釧台地を見下ろすと、長大な防風林が格子模様を形づくっています。北海道の開拓は、原生林を切り開き、原野を開墾するとともに、農地や住居を風雪から守るため、防風林が設定されました。中標津町・標津町・別海町・標茶町にまたがり一直線に延びた林帯が、別の林帯と直角に交差する景色は、雄大な酪農地域のシンボルとして守られています。

開拓使顧問のホールレス・ケプロンらが提唱した区画法に基づき、北海道では碁盤の目状に農地や道路、防風林が整備されました。防風林は、1800間（約3300メートル）



雪原に浮き彫りになった格子状防風林はまるで道路のよう

間隔に設定され、明治から昭和の初期にかけて全道各地で造成されました。防風林は、風害に

よる農作物の乾燥や倒伏を防ぐほか、夏には霧を消す効果、冬は風雪を受け止め道路の見通しを確保するという役割もあります。時に人命を奪うような地吹雪が発生する根釧台地では、いまま防風林は生活に欠かせないものとなっています。幅100間（約180メートル）もある格子状防風林の総延長は約648キロメートルに上ります。

防風林の主役となったカラマツ

道内各地の防風林は開拓当初、シラカバやミズナラ、ハンノキ、トドマツなどの雑木林でしたが、農地を広げようとして、薪や農機具の材料として伐採されるうち、消失した地域もあります。一方、根釧台地の防風林は、ほとんどが国有林で適切に維持・管理されています。伐採が進み、天然更新が追い付かなくなった防風林には、盛んにカラマツが植ええられるようになりました。寒冷地でも成長が早く、安価で大量に手に入るカラマツの苗木が、長野県から持ち込まれました。

中標津町内にある人工林のカラマツも、樹齢60年前後の伐採期を迎えています。長年、建築材には不向きとされてきたカ

ほっかいどうの本

（お近くの書店にない場合は
発行先へお問い合わせください）
（特記以外は税込価格です）

信じ合う 支え合う

三浦綾子・光世エッセイ集
北海道新聞社 発行
三浦 綾子・三浦 光世 著
011・210・5744
B6変型判 256頁 1728円



北海道新聞日曜版に掲載された三浦綾子のエッセイを主に構成された本書です。小学校教員時代のエピソードが特に興味深く、迷ったり、後悔したりを繰り返した綾子の姿が描かれています。

また、夫である三浦光世の綾子への思いが言葉の端々から感じられます。『手かざし』で綾子の失明を救ったことや、患者の不安を取り除く触診の様子に驚きました。夫婦とも難病を抱え、お互いに『死』というものを、ごく身近に感じながら支え合いました。また、クリスチャンとしての信仰に基づく、二人の強い絆が、エッセイの随所から伝わってきます。

二人の処世術が心地よく、いつまでも読んでいたい気持ちになりました。全体通して、許しに勝る罰はないという精神に貫かれています。今も二人がどこかで将棋でも指しながら、笑顔で話し合っている光景が思い浮かんできました。このエッセイ集を読み終わった後に、『母』や『銃口』を改めて読み直しましたが新鮮な読後感でした。三浦文学ファンは勿論のこと、それ以外の方にも読んでいただきたい一冊です。（藤）

札幌の地名がわかる本

関 秀志 編
亜細亜社 発行
011・221・5396
四六判 492頁 1944円



本書は亜細亜社の創立30周年記念出版として、平成30年（2018）11月に刊行されています。昭和52

カラマツの伐採跡には、生物多様性の観点などから郷土樹種のアカエマツやトドマツが植えられるようになっていきます。落葉しない針葉樹を植えると、冬季の風雪を防ぐ機能が高まるためです。高さ20メートル以上の高木の隣の列に2〜3メートルの木が育つと防風林としての効果は一層高まります。そのためにも計画的な伐採と植樹は必要です。

カラマツは落葉する針葉樹。秋には紅葉し、冬は幹と枝だけにな



カラマツ伐採後に植えられた常緑樹

集成材を柱や梁に使った児童センター「みらい」を2014年度に新築したほか、小中一貫学校の計根別学園、白樺斎場などの内装材としてふんだんに使い、地域材の利用拡大に取り組んでいます。

カラマツから郷土樹種へ



中標津産カラマツ材を使った木造の児童センター

ラマツですが、製材乾燥技術の向上、集成材への加工も可能になり、公共施設などで利用が進んでいます。中標津町は、カラマツ

ります。四季折々で姿を変える格子状防風林がやがて、常緑の林に更新されていくことを残念に思っている住民や旅行者もいるそうです。

後世に残すべき貴重な財産として「根釧台地の格子状防風林」は、2001年に北海道遺産に選定されました。地元ではこれを「ナスカの地上絵」（ペルー）、「万里の長城」（中国）と並ぶ、宇宙からも見える「世界三大人工物」と称して観光資源にしようとPRしています。

中標津空港に降り立つ飛行機からの眺め、標高270メートルの開陽台から望む根釧台地の風景を守り続けていこうと、景観保全にも力を入れています。2017年には町が景観行政団体に移行し、大規模構造物の建築計画などには事前の届出を義務付けました。



「景観学習」で町の地形や防風林の役割を確認する児童たち

小学4年生の総合学習の時間には、人の手で創り出した格子状防風林の役割について模型などを使って説明し、景観の成り立ちを伝え、後世に引き継ぐための「景観学習」も開かれています。

中標津町
主要産業は酪農で北海道らしい牧草地が広がります。町のランドマーク・開陽台から望む「視界330度の地平線」が有名です。

年（1977）のさつぽろ文庫第1巻『札幌地名考』以来、およそ40年ぶりとなる札幌の地名の由来や歴史を網羅した一冊です。

第1部では、10区の歴史と地名の由来を区ごとに紹介。かつて一帯が豊平川の中島だった豊平区「中の島」、加賀藩前田家の牧場があったことに由来する手稲区「前田」など、地名に隠された意外な歴史が明かされています。

さらに第2部では、地名の成立と変化を12のテーマから考察。地名「札幌」の歴史やアイヌ民族の暮らしと地名といった歴史学から、神社・公園の名称から地域の歴史や地名との関わりを論じるものまで、多様な視点で札幌の地名を読み解いています。

読み物としてのおもしろさはもちろんのこと、自分たちが暮らす地域や普段何気なく使っている地名に秘められた歴史やエピソードの数々は、札幌っ子の郷土愛形成にも一役買ってくれそうです。（竹）

カリンクル

オホーツク流水の民のものがたり

菊地 慶一 著／富沢 裕子 絵

共同文化社 発行

011・2551・8078

A5判 124頁 1080円

今から約千年前、オホーツク海沿岸にはオホーツク文化人と呼ば

れる人々が暮らしていました。彼らは遺跡や遺構を残しているものの、その起源と終焉は多くの謎に包まれています。

本書は1997年に北海道新聞オホーツク版に連載されていた作品をまとめたもので、半世紀近く網走で流水の観察を続けてきた著者が、突如姿を消してしまった流水の民にロマンを感じ、その謎に迫るべく想像力を膨らませて描いた創作童話です。



モヨロの村（現在の網走近辺）を舞台に、少年カリンクルが極寒の海での命がけの漁や異民族の少女との交流など、様々な経験を通してたくましく成長する様子が、挿絵とともに生き生きと描かれています。

物語の終盤、モヨロの村の人々はその一つの決断を下します。その結末は考古学的に裏打ちされた真実ではありません。しかし、真実がわからないからこそ感じられるロマンが、千年の時を超えて私たちの惹きつけ、想像力をかきたてるのでしょ。

（松）

新刊情報

書名の下に数字は日本図書コード（ISBN）及び雑誌コード。特記以外は税込価格。
お近くの書店にない場合は発行先へお問い合わせください。

- 北の文学2018 978-4-89453-933-4
北海道新聞文学賞・短歌賞・俳句賞
北海道新聞社 編
A5判 172頁 1300円
北海道の病院2019 16748-03
北海道新聞社 編
B5判 330頁 800円
北海道ランニング大会ガイド2019 978-4-89453-937-2
NPO法人ランナースサポート北海道 編
A5判 208頁 1296円
北海道コンサドーレ札幌 978-4-89453-934-1
オフィシャル・ガイドブック2019 監修
北海道新聞社 編、コンサドーレ
A4判 128頁 1300円
ファイターズ手帳2019 978-4-89453-938-9
北海道新聞社 編
B6判 164頁 1080円
となりの野生ヒゲマ 978-4-89453-936-5
いま何が起きているのか
北海道新聞野生生物基金、
北海道新聞社 編
A5判 176頁 1620円
カミイの大地 北海道・新風景
山本 純一 著 978-4-89453-935-8
A4判 128頁 3780円
懐かしいけど新しい
南部あき子のアイディア料理 978-4-89453-939-6
鳴原正世・南部ユンクイアンしず子 著
A5判 144頁 1728円
北海道日本ハムファイターズ 978-4-89453-942-6
オフィシャルガイドブック2019 編
北海道日本ハムファイターズ
A4判 128頁 1080円
北海道発Only Oneの家づくり 978-4-89453-941-9
VOI・14 新築&リフォーム 編
北海道新聞営業局 編
A4判 250頁 1400円

- スポーツ実況を100倍楽しむ方法
大藤 晋司 著 978-4-89453-940-2
四六判 224頁 1404円
樹の人 瀧口政満作品集 978-4-89453-943-3
瀧口 政満 著
A4変型判 208頁 3240円
北海道新聞社 編
011・210・5744
現代日本政治講義 978-4-8328-0847-9
自民党政権を中心として
数野 祐三 著
四六判 240頁 2592円
新しいエネルギー社会への挑戦 978-4-8329-7473-3
原発との別れ
近久 武美 著
四六判 188頁 2592円
北海道大学出版会 編
011・747・23008
南極あすか新聞1987 978-4-906740-35-2
―初越冬の記録
高木 知敬 著
B5判横 356頁 5400円
19-20北海道キャンプ場ガイド 978-4-906740-36-9
亜璃西社 編著
四六判 352頁 1404円
亜璃西社 編
011・221・53696
札幌キリスト教史の研究 978-4-8328-1901-6
―通史のための試み―
鈴江 英一 著
A5判 244頁 2808円
青年公家・清水谷公考の志と挫折
―箱館裁判所・箱館府創設と箱館戦争の狭間―
北国 諒星 著 978-4-8328-1902-3
四六判 235頁 1836円

- アイヌの漆器に関する学際的研究
浅倉 有子 編 978-4-8328-1903-0
B5判 296頁 4860円
北海道出版企画センター 編
011・737・1755
Feeding Signals 978-4-86453-061-3
乳牛の健康と生産のための
飼料給与の実践ガイド
Jan Huisen 著／中田 健 訳
A4変型判 84頁 3780円
テリイマン社 編
011・231・52691
Replan北海道VOI・124 4909401059-4
A4判 188頁 500円
札幌社 編
011・641・78555
月刊水産北海道 1月号、2月号、3月号
A4変型判 60頁 1000円
水産北海道協会 編
011・271・46003
カリンクル オホーツク流水の民のものがたり
菊地 慶一 著 978-4-87739-321-2
A5判 124頁 1080円
@クイズ・シリーズ 978-4-87739-322-9
青木 曲直 著
100×74ミ 232頁 514円
俺のモシリ ―オホーツク森の七つの物語
上伊澤 洋 著 978-4-87739-323-6
A5判 212頁 1296円
迷宮の人 砂澤ビッキ 978-4-87739-324-3
柴橋 伴夫 著
173×105ミ 296頁
1080円
旅人類 VOI・05 978-4-87739-325-0
吉田 類 編
B5判 144頁 1080円

- 爪 011・241・9341
@今日の一枚2018 978-4-87739-326-7
青木 曲直 著
100×74ミ 224頁 514円
土木技術を未来へはわたしたしする12のこぼれ 978-4-87739-327-4
土木、技術、橋、鉄道を考える 編
続橋が教えてくれたもの編集委員会
A5判 96頁 1728円
共同文化社 編
011・251・8078
自費出版・団体出版
詩集 タペストリー
中村 千代子 著／グッフォーの会 発行
A5判 96頁
句集 海嶺
尾村 勝彦 著／葦牙俳句会 発行
四六判 206頁
生協九条の会北海道・10年の歩み
生協九条の会北海道世話人会 編
生協九条の会北海道 発行
B5判 36頁
「季刊アイワード」発行のお知らせ
北海道の印刷出版文化情報誌「月刊アイワード」は、2010年4月発行の通巻346号をもって休刊していましたが、この度「季刊アイワード」として復刊いたしました。北海道の印刷出版文化情報を幅広く取材・紹介していきますので、ご愛読のほどよろしくお願いいたします。

紙の
とば
表のこ

霧海
山本 修一
40センチ×55センチ

「ニセコ山系の海拔750メートル以上に位置する神仙沼。周辺の湿地帯を散策した際、霧に覆われたアカエゾマツの群落が幻想的でした。」

全道美術協会（全道展）会友 札幌市在住